

忘れ得ぬ女

内山 如水

昭和三四年、十九歳の茂は新しい人生の目標を発見した。建設省が募集している建設大学の海外開発青年隊に応募するという新しい挑戦である。

応募条件は非常に厳しいもので、各県一名選抜試験を通過したものが各地方建設省で技術訓練を受け、語学教育、更に現地ブラジルに設置された訓練所で一年の訓練を経て、現地の会社や工場又は海外プロジェクトに参加して行くという。

当時の閉鎖的な日本から飛び出したいと願う茂にとっては願ってもないチャンスだった。

茂は早速資料を取り寄せ応募した。県庁所在地の岐阜市で県下から集まった十数人の志望者と共に筆記試験を受け、茂は県に与えられた候補者一名の枠に合格した。入隊は来年の春で、再来年の春にはブラジルに雄飛して行くことになっていた。

茂は母に相談もなく、青年隊に応募した事を苦に思っていたが、心中から突上げる衝動には勝てなかった。自分に正直に生きることがこの世に生命を与えてくれた父や母への恩返しだと思ってもいた。子供の頃から母は口癖の様に言っていた。

「貴方は将来外国で暮らす運命なのかもしれないわ、それが貴方の力を最大限引き出す方法かも知れないわね……でも何処に居てもこれだけは忘れないでね」

母は遠くを見るような目をして、何故か柔和な笑みを浮かべ

「貴方が生まれてきた理由、ここに居る理由、全て訳があるのです。貴方には貴方に委ねられた使命があるのです……貴方には今は判らないけど……」母の心中では長男の茂に対する期待感があったに違いないと思うが、母はあっさりとして茂の青年隊入隊を承諾してくれた。多分それは自分の子供の性格を知り尽くした母の諦めであつたのかもしれない。

翌年の三月茂は予定通り、名古屋市東区にある建設省中部地方建設局の管轄になる訓練所に入隊した。同期の隊員は八名だった。静岡、山梨、岐阜、長野、愛知などから選抜された技術者志望の若き獅子達である。年齢も十九歳から二九歳までの経験も技術程度も様々な青年達であつた。隊員宿舎は八畳間に二人づつ、モータープールの研修施設をそのまま利用したもので、青年隊の事務所は新しくプレハブの建物がそれに当てられていた。

教授陣は建設省の専門技官が当り、建設機械整備・機械工学・保健・ポルトガル語研修・測量・建設技術等の学科と午後からは実技指導で内燃機関やパワーシヨベル、ブルドーザーの整備・分解など渡伯した現地で遭遇するあらゆる状態に対応出来るような訓練が組み込まれていた。

紅一点の女性講師は保健を担当する技官で白井麻里といった。

色白の瞳がぱっちり、頬にかすかにそばかすの浮き出た、それが何とも色気が有って茂は一目で好きになった。年は茂より九才も年上で、既に結婚していた。

保健の時間が楽しくなった。ほっそりとした肢体、白い清潔なシャツの襟首から匂うような色香が立ち昇っている。その瞳を見る時何故か茂の胸は高鳴った。一寸受け口の下唇の厚い麻里の顔はやがて忘れられぬ存在となって茂の人生に懐かしい思い出を作っていくのだが茂は何らの予感も感じなかった。

青年隊は全寮制で、羽根という青年隊出身のOBが寮長のような存在で隊員の行動を監督していた。性格はやさしくにこやかに頬笑んでいたが、行動はきびきびして居て、戦前の軍隊の古参兵のように隊の規律を全員に教えこんだ。

隊の一番年長者は橘田という山梨の建設会社から入隊した男で、重機の経験が最も長く日組で黒四ダムの建設に従事したという超ベテランだった。

茂と同室になったのは長野から来た中島という二十四才の男で、航空自衛隊出身の空士長だった。後年、市谷の自衛隊の官房でノーベル賞候補となった三島由紀夫が割腹自殺を遂げた様に、進駐軍から押し付けられた平和憲法の九条の制約下では、軍人としての誇りも生甲斐も感じられないのかもしれないと、茂は思った。

中島は大人しい無口な男だった。容易に口を利かないが意見は明瞭に述べる男だった。茂とは一番仲良く交わった隊員である。

他に静岡から来た久保田や増田、焼津の山下、一番年下の角という男、都合八名だった。

朝六時起床、洗面後、宿舎の前の運動場に集合、近くの矢作川の堤防まで往復四キロの駆け足、それから体操。七時朝食。自由時間、八時半から教室で学科授業、十二時に昼食、午後一時から、実技訓練、重機械の整備・修理、午後五時終業、六時夕食、七時から九時まで授業、それから自由時間。風呂に入り、十一時消燈。

毎週月曜日から金曜日までその繰り返しで、土曜日にも正午まで学科授業を受ける苛酷な訓練であった。土曜や日曜日に許可を得て外出し、門限の午後十時までに

帰らないと、次週の外出は取り消しとなった。

戦後未だ十年の昭和三〇年代は集団を規制する鉄の規則が生きていた。

然しブラジル行きを自ら希望して入所してきた、目的意識の強い隊員達にはそんな事は問題にもならなかった。残り短い訓練期間内にいかに多くの技術を吸収するかを真剣に考え、互いに競争して技術の習得を競い合った。

驚異的な成果を訓練は挙げた。春秋二度の実習と称する四ヶ月間の訓練で先輩技師達と遜色ないレベルまで技術を習得したのである。

建設省所有の災害用十トン・ダンプトラックに、0.6m³のパワーショベルで崖を崩しながら土砂を山盛りに積み込む実習で、かかった時間は一分三十秒たらずだった。

トラックもブルドーザーもタイヤドーザーも自由に操縦出来、皆免許を取得した。整備や修理も実習で鍛え、一応どんな問題にも対応出来るようになった。

機械工学も機械図面や建設図面も理解出来た。広いブラジルの山野を測量する為に測量から計算、作図までマスターし、一般大学で四年かかるコースを一年の日夜の学習で制覇した。機械部品の罫書きから穴あけ・タップ通し・旋盤加工・平研磨、冶金工学等、一応の精密機械の作業経験を積み、現地での部品製作にも対応出来るような技術を身に叩き込んだ。人間はやろうと思えば何でも出きる。その例えが戦時中の、特攻隊や女子中学生や高校生の従事した旋盤工や精密部品造りの実績である。あの緊迫した状況ではやろうと思えば何でも出来たのである。

入隊して、僅か半年で十トンダンプの運転に習熟し、複雑なパワーショベルの操作はベテランの教官が舌を巻く技量だった。理論と実地を集中的に教育すればやる気があり、それに適性が伴えば四、五年の現業での経験が半年で習熟できるのである。教官たちも本省の命令を受けて、試験で選ばれた隊員の教育に各地方建設局の威信と誇りをかけて全力を尽した。

入隊して四ヶ月程たった初夏、保健の授業が終了すると、白井技官は隊員の全員に明日の土曜日に自宅でパーティをするから参加しないかと話しかけた。

当時隊内は遠藤派と実力派の茂の両派に分かれ勢力争いを続けて居たので、麻里の招待にも遠藤派は辞退を表明した。

茂が麻里に好意を寄せ、麻里を始め教官達は成績抜群の茂を高く評価しており、

その事情を敏感に察知した遠藤は麻里の好意を無視してその招待を拒絶したのである。

誰も進んでパーティーに参加すると申し出ないので麻里は茂に自宅の地図と電話番号を渡し、耳元で「土曜の夜待っているわ」と囁いた。

土曜の夕方は皆外出して寮生は中嶋と茂の二人だけだった。茂は中嶋と一緒に麻里の家に行こうと誘ったが、中嶋は婉曲にその誘いを断わった。

「君一人で行ってこいよ、俺は街に出て映画でも見てくるよ」

誰も居なくなった部屋で茂は畳に寝転がって麻里の顔を思い返していた。《九才も年上の女、結婚していて三才になる男の子が居るといふ。そんな家庭にのこのこ出かけて行く自分の気持ち判らなかつた。然し、女は若ければ良いというものでもないし、第一、若い女と一緒にいても楽しくなかつた。

大人の女の強烈な魅力には逆らえなかつた。洗練された言葉使い、清潔な服装、品のある装い、どれをとっても麻里は素晴らしかつた。黒いスエードのハイヒールに白いまっすぐに伸びたかっこいい脚、少し受け口の赤い唇、頬にうっすらと浮ぶ雀斑、キラキラ輝く黒曜石のような黒い瞳……》麻里の情念の絡んだ視線を思い出すと茂は抗し切れなくなつて外出の仕度を始めた。

麻里は茂が、今まで付合つた女性の誰よりも情熱的でセクシーだつた。麻里の渡してくれたメモに従つて、バスに乗って瑞穂グラウンドの暗いバス停に下りた。

「川の傍の左の二階屋、其処が私の実家よ。待っているわ……」

妖しい笑みを浮かべて茂の瞳を除き込んだ麻里の目を茂は思い出す。暗い夜空から細かい雨が降り出して、見知らぬ街で方向を失つた茂の心を萎えさせた。

暗い道を行きつ戻りつ、必死で麻里の家を探す茂の前方に黒い人影が見えた。傘をさした麻里が暗い道の真中で茂を待っていたのである。

「ここよ茂さん、探した？」 闇の中から暖かい麻里の声が伸びてきて、茂の心に明りが燈つた。

「待っていてくれたの？」 麻里の傘を握る手に手を添えながら茂は麻里の頬に口付け、温かい唇にそつと触れた。暗い闇と生温かい雨が二人を用心深く包み隠してくれていた。母屋の裏に離れがあり、それが麻里の住居だつた。

「主人は出張で留守をして居ますの、貴方が今夜いらつしやる話をするよ、お会い

できなくて残念だと言っていましたわ、それから貴方に宜しくと言ってましたわ」
自分の来る事を主人に知らせてあったということが茂にはシヨックだった。初めての訪問なのに、夜の九時過ぎに訪れて母屋の人に挨拶もしていない自分の常識外れの行いが茂を苦しめた。

「入って狭い家だけど……」こじんまりとした文化住宅だった。

「御主人は何を為さっていらっしゃるんですか？」

「進学塾の先生よ、今日は東京で会合があつて、明後日まで戻れないの」

見ると隣りの部屋の襖が開いていて、眠っている小さな子供のおかっぱの頭が見えた。

「三才になるの……」麻里は優しい目をして子供を眺め、

「おなか減ったでしょう？ 鋤焼よ、今夜は……」

カラフルな紫と黄緑、それに水色の三色プリント地のスカートをくるくると回転させながら、麻里は手際良くテーブルに料理をセットして行く。

妖精のような軽やかな足運びと優しい歌うような甘い声、年の差は九歳も離れているのに、精々二、三歳の差しか感じさせない。

こんな楽しい時間がこの世にあったとは、茂は考える。こんな素敵なお女性を残して自分はブラジルに旅立とうとしている。自分は何か間違った決定をして居るのではないか？

そんな疑問が頭を過つたが、ぐつぐつと煮えた霜降りの肉の塊に、情けなく茂の腹はグーッと鳴った。

先ほどから飲んでいるビールの酔いが茂の心を大胆というか鈍感にさせている。

《もう、何でも来い。据え膳食わぬは男の恥だ。……》茂は覚悟を決めて大きくグラスを傾けた。

茂は酔っていた。暗い部屋の中で麻里が敷いてくれた布団に横たわっていた。浴衣に伊達巻を締めた麻里が隣りの布団に入り枕もとの電気を消した。互いに沈黙を守っていたが、茂は麻里に声を掛けた。

「そっちへ行っていない？」

麻里の返事より早く、茂は麻里の薄い夏布団の上から麻里を抱きしめ唇にキスをした。

「抱いて……」そのまま麻里の浴衣を剥ぎ取り苦も無く麻里の中に入っていた。

伸ばした両手で裸の麻里の尻を掬う様にして引き付け茂は根本まで麻理の奥に侵入した。

「ふぁー」

深い深呼吸と高いよがり声が吐息と共に吐出された。待ち焦がれていた快感にうめく様に反応する麻里の口を麻里の液体で濡れた手指で塞ぎ声を殺した。

「痛っ、た、た」麻里は俗にいう『巾着』だった。茂は締められて余りの強さに痛みさえ感じた。暗闇のなかで大声で善がり声を発する麻里の口元を手で覆いながら麻里の強烈な筋力に音を上げた。

人妻と経験の無い未熟な若者が、突然タッグ・マッチを組んだようなアンバランスなラブ・アフェアだった。あれだけ恋焦がれた人妻との情事が、こんなに簡単に結ばれて、呆気ない、複雑な心境だった。

強い痛みの中で無我夢中で麻里を抱き、瞬く間に果てた。緊張が退いて、睡魔が茂に迫ってくる。茂は温かい麻里の太腿に手を置いて寝入った。

翌朝麻里に起こされて二人は美濃の名所である養老の滝を見に出掛けた。高さ三〇メートル、幅四メートルの、岩角を打って流れ落ちる水は清冽だったが、茂には麻里の意図が解らなかった。茂にはこの観光の目的が判らなかったが睡眠不足で生あくびを連発する茂を連れて、麻里は茂との思い出を作りたかったのかもしれない。茂にとっては只の苦行であったが……。

生活力もなく、一般常識もない未成熟な茂には、麻里を浚って奪う野心も力もなかった。ただ動物的な雄の本能だけがあった。自分の可能性と人生に漠然とした自信は持っていたが、具体的な戦略も戦術もなく、盛りのついた唯の雄犬だったのである。

夏が過ぎて秋の気配が深まった。隊員は二手に別れて二ヶ月の実習に向うのである。茂達の行く先は静岡県阿部川上流のとある村だった。村のお寺に民宿し阿部川に洪水用堤防をブルドーザーやスクレパーを使って造成するのである。

阿部川の広い河原を排土板をつけたタイヤドーザーで疾駆するとき、若き茂の血が騒いだ。エンジンの唸りを上げ象のような巨体を自由に操縦する醍醐味は日本人が失った闘争本能を掻き立て、何故か懐かしい爽快感が茂の体を包んだ。

『ウォー、ウォー、』まるで象に乗って戦場を疾駆するように雄叫びを上げながら、

なだらかな河原の砂利を蹴散らして、流れに削られた洲に乗り上げ、たちまち頭を振り下ろすように川のなかの深みにはまり、キラキラと早秋の日を浴びながら太いタイヤの脚を回転させ浅瀬を駆け登る。平坦な浅瀬は五速に入れて象の背に揺られる様に長駆した。

カタカタとキャタピラの音を立て小松のD-12型ブルドーザーは、巨大な船形のスクレパーを引いて行く。堆積した砂利の山に登り、ギアを一速に落とし、エンジンを全開し、ウインチでスクレパーの底を開け、巨大な胃袋のなかに腹一杯に砂利を掬い上げ腹を揺すり上げながら掬いこむのである。エンジンが咆哮し断末魔の唸り声を上げる。エンスト寸前迄負荷をかけ続け、停止寸前でウインチを巻き上げ砂利の山から駆け下りる。

時折無理をして、エンジンが逆回転してしまう事があった。つまり排気管からエアを取り込み、エアクリナーから真っ黒な煙を噴出するのである。茂は慌ててエンジン止めを止める。

スクレパーの効率的な行動範囲は一周八百メートルから一キロの距離である。砂利の採取現場から築堤の現場までが丁度その位の距離だった。

築堤の上に登り腹から土砂を吐出しながら均し、五速に入れ替えて河原を突っ走る。要するに咆哮する戦場と軽快なドライブを楽しむ戦士のようなものである。

朝の十時から昼食を挟んで夕方五時まで作業は続く。空はあくまでも高く、水は清く流れ、紅葉を始めた山々を眺めながら、昼食の握り飯を頬張るのは楽しかった。民宿している寺の本堂に訓練生四人と教官の技官達技術者が十人ほど泊りこんで四ヶ月間の訓練が続いた。

楽しみは麻里からの手紙だった。夜食事も終わり、風呂にも入った訓練生は日報を書き終え自由になる。麻里の手紙は、勿論本名ではなく別の苗字と名前が書いてある。封筒を掴んで茂は一人御堂に籠もる。

別棟の御堂は畳み六畳ほどの大きさで、奥は仏壇になっており、その前に布団を敷いて、手紙を読む。懐かしい大人の女の香りを嗅ぎ、懐かしい気持ちに浸った。

麻理の愛嬌のある黒い眼、白い頬に紅い唇、黒いスエードのハイヒールと白い引き締まった足首、それらが断片的に茂の目の前に浮んで来る《欲しい、もう一度彼女を抱きたい。今度はもっとゆっくりと、全てを眺めてキスをして……》

綺麗な楷書で書かれた洗練された文章、そして最後には紅のついたキスマークが

押されていた。茂は匂いを嗅ぐように自分の唇をそれに近づけ優しく触れた。

《逢いたい……》麻里の優しい笑顔が揺れる……《キスして……》麻里の声が耳もとで耳朵を擦る。温かい麻里の中に包まれて、二人で果てたあの時の思い出が、何時までも脳髓に纏わりついて離れない。

たった一度の禁断の果実、茂の若さの故か、麻里の周到的な配慮の所為か、茂は残念に思う事がある。明りを消した部屋の中で急に火が点いたような愛の交換に、ゆっくりとした愛撫も視線の楽しみも皆素通りして、烈しい情熱のままに肉体の結合という味気ないメイク・ラブに終わった事が、今から思うと残念に思われて仕方がない。茂は麻里の乳房も、美しい肢体も、秘密の泉も目で慈しんでいなかった。まるで驢馬が目隠しされて、いきなりオアシスの水辺で力づくで水を飲まされたような心残りの逢瀬だった。遠い記憶を辿るうちに、昼間の疲れと麻里を偲んで下着を濡らした疲労感が眠りを誘った。

安倍川の上流の右側に築かれた堤防は幅十メートル、高さ十メートル基底部分三メートルの台形で長さは一キロメートル程あった。これが隊員四名で、僅か二ヶ月の間に施工したのである。いかに重機とスクレーパーの威力が凄いものかを物語るものである。

昼休みになると、茂は例の三菱重工製タイヤドーザーに乗り、川下に向かって走って行く。

ステアリング操作は圧縮空気ですぐ右へ廻りたい時は、空気圧で右側のホイールにブレーキをかけ左側の車輪を回転させて右に廻る仕掛けである。直径二メートルを超える巨大なタイヤが前後に四つ、それに四メートル幅の巨大な排土板をウインチで上げ下げする構造である。まるで巨大な象の背に揺られているみたいで、茂はその感覚が大好きだった。

ゴロン、ゴロンと唸りを上げて、河原を走るとき茂は自分が神になったような錯覚を感じて爽快だった。浅瀬を探して対岸に渡り、作業現場に引き返して来ると、技官の乗ったジープが茂に向かってライトを点滅させた。

ドーザをジープの近くに停め、車軸を伝って地上に降りると、

「内山君、電報だ。君の母上が危篤だそうだ……名古屋の本局から電話で知らせてきた。これから静岡駅まで送るから直ぐ仕度をする様に」

電報を見ると、姉からで

「ハハキトクスグカエレ ヨシ」とあった。夏に体調を崩していた母を技官の麻里と見舞ったが、まさかこのまま死んで仕舞うとは想像もして居なかった。

取あえず静岡駅にジープで送ってもらい、東海道線の下りに乗りこんだのが午後四時だった。名古屋駅で名鉄線に乗り換え、鵜沼の駅に就いたのは六時を廻っていただろうか。普通なら美濃太田で越美南線にのり、加茂野で下りるのだが、母が呼んだのか茂は急いで鵜沼からタクシーに乗った。所持金は無いが、自宅に帰れば誰かが居る。タクシー代は姉か妹に借りればよいと判断し、車の振動に身を任せた。自宅に帰ると、妹が飛んで出てきた。タクシー代を頼んで、そのまま近所のかしわ屋のおやじの運転する軽トラに乗り移り、隣り町の病院に向った。

《死なないで呉れ、俺が行くまで死なないでくれ……》

必死に神に祈る。病院の白い建物が見えてきた。

と、門の中から顔見知りの近所の人達と、哀れリヤ・カーに布団で包まれた母の遺体が運ばれてくる。

母の遺体だと認識はしたが、茂はそのまま院内に入ってしまった。

二ヶ月前に母を見舞った病室に真っ直ぐ茂は向った。

暗い部屋の中にシーツも剥ぎ取られた寒寒としたマットを載せた裸のベッドがあった。

暗く深い悲しみが押し寄せた。茂は床に膝まづき。ベッドに頭をつけて泣き伏した。《母はここで自分の来るのを待っていたのだ。先ほど行き違ったりリヤ・カーの母の遺体には母の靈魂は感じられなかった》母は息子との最後の別れを二人だけの部屋で執り行いたかったのだろう。

病院中に響き渡るような茂の号泣を、子供時代から茂を知るかしわ屋のおやじはどう思っただろうか、あの腕白小僧が自分の母をこれほど愛していたとは信じられなかったかもしれない。時折、ベッドに泣き伏す茂の肩を慰め顔に、さすりに来ては呉れたが、親子の別れを静かに見守ってくれた。

我にかえったのは、部屋に入ってから半時間ほどあとだった。母の靈魂は待っていた息子の魂に触れて安心して遺体に戻って行った気がした。

茂はかしわ屋の親爺と軽トラに乗り、今度はリヤ・カーに乗っている母の遺体を追いかけた。肥田川の辺りでそのリヤ・カーに追いついた。茂は車を引いている近所の人達に御礼を述べ、代わりにリヤ・カーのハンドルを握って歩き出した。

先ほどあんなに悲しかった母との別れが嘘の様に払拭されて、落ち着いてものを考えることができた。母は享年五五才、昭和三五年九月十三日のことだった。

まるで苦勞をする為にこの世に生まれてきたような母の人生だった。父と会い、五人の子を産み育てて、死んで行った……。でも苦勞はしたが、母はきつと楽しかったに違いない。病気の夫を養い、子を育て、力尽きて死んでいった。自分の使命を果たした満足感のようなオーラの燃焼が感じられた。

「あとは自分達でやるのよ……」と、言っているようだった。母の死を悼んで大勢の人が手伝いに来てくれていた。それが母の勲章のような気がした。

《御免ね。長男の俺が確りしていなくて……》茂はリア・カーの握りを強く引きながら心のなかで母に侘びた。

《仕方ないわね、貴方を生かす為には、外国に行くしか無いかもね……》
それが母の口癖だった。

母と最期に会ったのは一月前の盛夏の頃だった。最初の「ハハキトク」の電報を受けて名古屋から麻里と一緒に駆けつけたのが例の病室だった。

やせ細りそれでも笑顔を返してくれた母、今生の別れとも知らず麻里との帰る時間を気にしてゆっくり別れを惜しむ事も出来なかった薄情な息子の自分……《何と俺は薄情な人間だろう、自分の事ばかり考えて、幾ら恋は熱病と言ったって、自分の母が死にかかっているのに、役所に帰る麻里の時間に会わせて病室を出てきてしまった自分……何故残って母の看病をしなかったのかと、今となって悔やむ茂だった。薄情な自分の仕打ちを心で侘びながら茂は病室を出たのを思い出す。

これから麻里を名古屋まで送っていかなければならない。大事な母との今生の別れとも知らず、麻里のことが気になってゆっくりと別れを惜しむことも出来なかった。そんな別れ方をしたから、母は自分を待っていて呉れなかったのだ。母の死に目に会えない親不孝を侘びながら、せめて麻里と母が一目でも会うことが出来たことを慰めと思った。

「茂さんはとても優秀で私達全員が期待していますのよ……」

麻里の話の聞いている母の目が嬉しそうに輝いて、目に力がこもっていた。今ま

で他人から褒められたことがなかった息子を建設省の偉い技官に褒められて、母は嬉しかったのだらう。

母の葬式をあたふたと済ませ、気がついたら、阿部川の現場に立っていた。母の死は茂を精神的に成長させた。大人の厳しさを悟り、無駄な感情や甘えを捨て去った。母の魂も一緒に連れて海外に行こう、母と一緒にならそこそ気楽に海外に渡れる……そんな感慨もあった。誰もたよるものは無い。頼れるものは自分の肉体と頭脳、気力だけなのだ何回も自分に言い聞かせた。

十月になると訓練は静岡の阿部川から名古屋の築港に移り、パワーシャベルの実習と災害用ダンプの運転実習が始まった。

積載能力十トンのダンプに山盛りに土砂を乗せ、シャベルの底で押しつけ均すと重量はほぼ倍になった。空荷の時は人指し指で運転できるダンプが土砂を満載するとまるで石臼の様に重くなり、大きなハンドルを両手で握っていても地面のでこぼこにハンドルを取られて一瞬の油断も出来なかった。

山から土捨て場まで往復すると、若い隊員たちも疲れきってしまうほどだった。然し帰りは軽乗用車を運転する様にすいすいと宙を飛んで帰って来る。

若さに適性と、技術を覚え様とする意欲と情熱さえあれば、若木が水を吸い取る様に、ものすごい進歩を遂げることができた。勿論仲間のなかにはケーブルでシヨベルのアームを壊したり、事故を起こしたりした者も居たが、大きな事故にはならなかった。

茂は正月は独り隊員宿舎で過ごした。母の居ない無人の自宅には帰ることも出来なかった。小学生の弟は新婚早々の姉夫婦が引き取り、郡上の山奥で暮らしていた。年が明け、出発の春が間近になった。隊員たちはブラジルの医療を考えて、病気でも無いのに盲腸の摘出手術を受ける者が居て、茂も勧められたが決心はつかなかった。

運は天に任せてこそ面白い。そんな小手先の準備で運命を逃げられるものではない。その運命に立ち向かえるだけの心の準備と技術の訓練は十分に受けた。後は何でも来いの覚悟だけだ……茂はそう思った。

出発は三月と決まった。全国の訓練所から集められた凡そ七〇名の隊員がアルゼンチナ丸に乗船して渡伯する事になった。

出発を半月後に控えたある日、茂に思わぬ事故が起こった。高校生の時から治

療していた蓄膿症の症状が悪化し、此の際手術しようと決心したのである。

蓄膿症の手術は一ヶ月の入院治療を必要とする大掛かりなものだった。建設省の幹部に相談すると、止むなしということで、出発を二ヶ月遅らせ五月出発ということで、手術は許可された。

麻里に連れられて、I医大の病院に入院した。実は麻里はこの大学を卒業して建設省の技官に採用されたので、母校の病院には特別のコネと、繋がりを持っていた。執刀は耳鼻咽喉科の教授に決まった。勿論麻里が万事滞り無く心を配ってくれたからである。手術の予定日が決まるまでの数日、待機入院している茂を伴って、麻里は三階の病室を訪れた。

「ここに大学の後輩が入院しているの……」麻里は気さくにそう言ってそのドアを叩いた。部屋に入ると、大きく開かれた窓から新緑の緑が目に入った。大柄な真紅のガウンを羽織った女がベッドに腰を掛けていた。透き通るような白い肌に、腰高の長い脚、映画カサブランカのイングリッド・バーグマンにそっくりの、見ると右足の踝の上部まで石膏のギブスで固定されて居り、彼女の入院の理由がわかった。「中村さん、中村明子さん、彼女独身よ、年齢は……勿論私よりもずっと若いし、美人でしょう？」麻里は屈託なさそうに口に手をあてて笑い、そのすべすべした白い肘が涼しそうに見えた。

「中村です。麻里さんと同じ大学の後輩、三年後輩です」

「脚をどうされたのですか？」心配そうに覗き込む茂の視線に

「アキレス腱を切ってしまったの……」憂いを含んだ長い睫を瞬かせながら、細表の顔をほころばせた。麻里よりも長身で体格も良いが麻里の持つ温かい雰囲気とは違い、ある種の緊張感が茂に伝わった。彼女も保健関係の仕事に従事しているという。紹介の会話は直ぐ終わった。

「この方、もう直ぐブラジルに雄飛なさるの、日本はこれからなのに、残念ね……」

麻里は自分の考えを後輩の明子に押し付ける様について

「三階と五階だから、仲良くして、淋しくなったらここに遊びに来るといいわ……」

と、無責任なことをいって初対面の二人を困惑させた。

「いいわよ、遊びにいらして、いつも退屈しているの……」

明子は遊びなれた大人の女の貫禄を示して軽く笑った。

「退屈したら本を借りに来ます」茂は言葉少なに明子に別れを告げ、部屋を出た。

ナース・ステーションの前を通って二人はエレベーターで下に下り出口に向った。

「手術は明日に決まったし、坂口教授が執刀されるならもう安心だわ……」

時々麻里は名古屋弁で話し、受け口をそばめて笑う。そんな仕草が茂は堪らなく好きだ。笑うとくつきりとカラスの足跡が目元に浮ぶが、返って愛嬌に感じられ、九才年上の女

に抱く慕情はいや増すばかりである。人生経験も経済力も全てが、たち勝っている年上の女との交際は与えられるだけの一方的なものだった。こちらが拒否も要求も出来ない一方的な愛のお仕着せ。愛に餓えている若者はただ貪り食らうしか方法が無かった。大人の女が持つ魅力に腹を空かせた狼が投げられた餌をががつと食い散らすに似てあさましく互いに欲望は感じて愛などとは呼ぶ価値の無いものだったかもしれない。

「明日、手術の前に来ます……」麻里は事も無げに事務的にそう告げると足早に大通りに向かって足を速めた。茂の不安や淋しさ、苛立ちも含めて、無視したような、極めて事務的な態度である。《仕方ないさ、役所に家庭に、それに俺の面倒を見ているのだから、しかし何故八名の隊員の中から俺を選び、家庭のなかに招待し、俺の事を心配してくれるのだろうか？ 単なる人妻の浮気心かそれとも憐憫か、何か他の意図があるのだろうか？ そしてそれは、最初から海外に行ってしまう運命を持った孤独な若者に対する好意をともなった憐憫なのか？ 茂には自分の存在に、何か特別な価値があるとは思えなかった。こんな価値のない自分を認め愛してくれた麻里に茂は無限な感謝と愛を感じてしまう。まるで母の再来みたいに……》

手術の当日、朝から不安が茂を悩ました。始めて受ける手術に茂も麻里も興奮して落ち着かなかった。時間が来て、茂は白い手術衣を着せられ寝台車に乗せられて長い廊下を運ばれていった。傍には麻里が我が子に付き添う母親の様に、何くれとなく茂に話し掛け不安を取り除こうと焦っていた。

二人だけになりたかった。手術室が目前に迫ったとき、麻里は素早く自分の口から唾液を指に絡ませて茂の口に含ませた。茂は待望の麻里の指を動物の様に吸い込み舌を絡ませて別れを惜しんだ。

看護婦や医者 of 衆人環視の廊下で役所の技官と隊員の公的な関係上、腰を屈めて

口付けするという事は危険だった。手術室のドアが開かれ、皆の注意が逸れた瞬間に麻里は人指し指に唾液を絡ませて素早く茂の口中にそれを差し込んだ。機転を利かし、間接的な濃厚なキスをしてくれたのだった。死に赴くような気分の茂には、そのキスがどれだけ甘く元気付けになったか、麻里の唾液を感謝しながら茂は飲みこみ、甘い陶酔のなかで茂は手術に対応する勇氣と覚悟を持った。

局部麻酔の蓄膿手術は衝撃や痛みには患者が耐えなければならぬ、苛酷な手術でもあった。激しい痛みと骨を削る音やハンマーの衝撃や鑿の感触、茂は麻里の熱い心によってそれに耐えた。

目が醒めたのは二日後だった。痛みが顔中に広がり気がつく顔が包帯でぐるぐる巻きになっていた。顔が腫れ上がり熱があった。麻里の優しい顔がまじかに茂の目を覗き見る近さにあった。

「痛い？」優しい、母のような慈愛に満ちた視線と、焼けつくような欲望の対象となる麻里の白い肉体が一緒に存在するのが不思議だった。

「痛かったよ……」茂は姉のような麻里に甘える様に正直に答えた。

「良かったわね、もう大丈夫、一週間もすれば腫れも引いて包帯も取れるわ、そうしたら又元気になるから」麻里は茂の容態を確認して安心して帰って行った。

回復期の退屈な日々が続いた。麻里はあれから安心したのか、音沙汰が無くなった。まるで手術が済んだら自分の役目が終わったように、ばったりと訪れてこなくなったのである。ベッドに転がって本を読む毎日、その本も無くなって、茂は三階の明子を思い出した。然し、顔半分が大福の様に丸く腫れ上がった状態で明子を訪ねるのには何か抵抗があった。

麻里よりは年下でも、六歳も年上だった。麻里との九歳の隔たりに抵抗を感じないのに、明子の七才の違いは何故気になるのか不思議だった。多分家庭を持ち子供もある麻里を自分の結婚相手とは考えていない深層心理の所為だろうか？

然し麻里は明子より深い思慕と憧憬と、自分自身にとって無くてはならぬ存在と なってしまっている。つまり情が移ってしまっているのだ。一緒に物を食べ、買物し、愛を交わした麻里は単なるガール・フレンドの領域を越えてしまっているのだ。そんなことさえ認識出来ない若い自分を茂は悲しく思った。麻里の心情も理解しない、何故来ないのだろうと、自分の事ばかり考えている青臭い自分に愛想が尽きる思いだった。

《そうなんだ、手術の傷が快復するという事は、出発の時間が遣ってくる事なんだ。だから、傷の快復を確かめるのが麻里は怖いのだ。だから意識的に茂に会うのを避けているのだ》そこに思い至ると麻里の悲しい気持ちが理解出来たが、ブラジルへのお出発が五月十日のアメリカ丸乗船と決定した今、茂の心は揺れに揺れた。

二〇十四年の今なら飛行機で一日で行けるブラジルのサントス港が、一九六二年当時は船で五五日もかかったのである。

神戸から横浜、次はロス・アンジェルズ港、メキシコ沖を通って南下してパナマ港、それから順番を待つてパナマ運河を渡り、大西洋に出てキュラソ、クリストバル、南米航路に入ってブラジル北端のアマゾンのベレン港、それから南に下ってサントス港に漸く到着するのである。当時、移民は棄民といって政府は国策で移民を奨励していた。大半が農業に従事する農業移民で産業開発青年隊のように技術を身につけ技術移民を目指す試みは始めてであった。然し、日本を一旦出しまえれば、帰る当てのない鉄砲玉だった。移民した大半が志し半ばで倒れ、帰国を果たしたものは一割にも満たなかった。

出発も余すところ一月半となった。今、自分に出来ることは何か？ 自分が必要としている事は何か？ そんなことを考えると脅迫観念に駆られて眠る事も出来なかった。

麻里に会いたくても会えないもどかしさ、悶悶と暮らす日が続いた。或る日、麻里から電話があった。

「自分は葡萄状菌悪性絨毛上皮腫に罹って、手術する予定なの」と言った。

《悪性純毛上皮腫？》一度も聞いたこともない病名だったが、婦人病ということは判った。たった一度だったが、俺との関係でそうなってしまったのか？ そんなこととは無い筈だと自分では否定するが、それが原因で麻里が疾病したとしたら、だから病名も教えてくれたのだ。

然し、自分は性病には感染していない。そんな自分が本当に原因なのだろうか？

心配はしていたが、自分も病室に閉じ込められた患者の身、麻里が何処の病院に入院したかも知らないで、とうとう見舞いにも行く事が出来ないうちに、麻里は退院してきた。

自分を囲む逼迫する情勢に、何ら主体的に手を出せない、経済的・社会的に無力

麻里だったが、幾分瘦せたものの元氣そうで茂は安心した。

「御世話になりました。御元氣でお暮しく下さい。」

「貴方もね、決して無茶をしないこと、それから自分を大事にして、貴方には使命があるのです。なぜ人妻である私が、貴方をこんなに愛したか考えた事がありますか？ それも皆訳があるのです。」

麻里の手料理で飲む酒が、幾ら飲んでも酔わなかった。トリスの角瓶を空にしたとき、麻里の引きとめる手を振り払って茂は麻理の家を出た。これ以上麻里や家族に迷惑を掛けたくなかった。外に出ると小糠雨だった。始めてこの家に来た時も雨だった。そして今夜の別れの夜も、茂は何か運命的なものを感じて、これが麻里との今生の別れだと感じた。

時計を見ると未だ十時前だった。消燈ぎりぎりだったが、車を飛ばせば間に合うかも知れない。茂はタクシーを探して大通りに駆出した。

明子の部屋に着いたのは消燈の直前だった。ナース・ステーションのナース達も同大出身の先輩である明子には特別待遇で少々の事は見逃してくれていた。

部屋に入ると明子は真紅のガウンのベルトを腰高に締め、大輪のバラの様に頬笑んで茂を迎えた。

「神戸から来たの？ もう会えないかと、心配していたの……」

ギブスさえなければ、このまま何処かに連れ去りたい欲望に駆られて、長い黒髪に手を添えて白い頬を引き寄せ、軽く口付けした。

「お酒飲んできたのね、病室では御法度よ」

「判っている。もう酒は飲みたくない。浴びるほど飲んできたんだ」

「どうしたの、そんな貴方初めて……」

「どうせ俺は誰からも嫌われて、一人で遠いブラジルに行く男さ。」

「何処で飲んできたの？」

「麻里さんの所、あの人も今生のお別れをして来たんだ、多分これでもうあえない気がする……そして、君とも、君の兄貴に、妹はブラジルにはやれないと言われたんだ……」

茂はベッドの傍らの椅子に上着を掛け、倒れこんで下を向いて頭を振った。

「水を呉れ、……」明子が差出した冷蔵庫の水を美味そうに飲んで、

「俺今夜ここに泊っていてもいいかい？」

茂は、当然断わられると思ひ、直裁に尋ねたが、明子は、何も言わなかった。

「貴方が準備が出来たら、私必ずブラジルに行くわ、だから、一人だなんて言わな
いで」

「信じていいんだな、本当に……」茂は苦しくなってネクタイを外し、シャツのまま高い寝台のシーツの上に倒れ込んだ。明子は茂の靴を脱がし、靴下を剥ぎ取ると、ズボンを脱がしシーツを掛けた。消燈後の暗い部屋のなかで明子は寝入った茂の顔をサイドテーブルの明りで眺め、白い病室の壁を凝視していた。

茂は夢を見ていた。左側にすべすべした絹の感触を受けて、手を伸ばすと明子の柔らかい乳房だった。茂は大きく伸びをした。ひと寝入りしたせいか気分も良くなり、水が欲しかった。

「水、……」茂は起き上がって隣りに寝ている明子を見た。

「サイドテーブルに用意しておいたわ」明子は明りをつけて茂にその位置を示し、「静かに、」と人差し指を唇に当てた。

時計を見ると午前二時だった。明子は一睡もせずに茂の目覚めを待っていたらしい。黙って何も言わず、運命の通りすぎるのを待っているように、抗議さえしない。気丈というか覚悟が出来ているというのか、とにかく明子は大人だった。迷いもなく不動だった。茂は安心して明子を胸に抱いた。すべすべとした大人の女の色香、じつと堪えている息遣い。息を殺して、拒みもせず、ギブスの脚を庇いながらも茂の思いを存分に受け入れてくれる。その度にそっとベッドを三回も抜けて行きトイレで身を清める明子を、茂は有難うと心で囁いた。生活の基盤が出来たら、必ず迎えに来るから、そう心に誓って目を瞑った。

「起きて、もう直ぐナースの巡回時間だから、……」

明子はてきぱきと茂に衣服を着けさせ、暗い廊下を伝って非常階段のドアを開けた。

「ここから階段を降りて一階に行き救急病棟の入り口から外に出るの、私はエレベーターで屋上に出て貴方を見送るわ……」明子は夜通し考えていたのか、茂の脱出方法まで指示して最期の別れのキスをした。

「元気でね……」

「君も……」気配を感じたのか明子は背中で扉を閉めた。

病院の玄関から大通りに出た。屋上を見上げると東雲の光彩に浮ぶ明子のシル

エットが小さく浮び上がり、路上の茂に大きく手を振って居る。

《さようなら、僕は思い残す事無く行くことができます。勝手な僕を大切にして呉れて、有難う。これで僕は気持ち良く日本を発って行けます……》茂は大きく手を振りながら心のなかで叫んだ。

—完—